商店建

SHOTENKENCHIKU MONTHLY MAGAZINE OF STORE DE

1

付録

P&
ROOM
BOOK
ssional
2015

平成27年1月1日発行 毎月1回1日発行 昭和31年9月12日第3種郵便物認可 第60巻第1号 通巻745号 商店建築2015年1月号別冊付録「SHOP & SHOWROOM GUIDE BOOK for Professional 2015」付き

thank you!

editor / SHOTENKENCHIKU
KENICHI SHIOTA

merci!

商店建築
www.shotenkenchiku.com

SHOTENKENCHIKU-SHA PUBLISHING CO., LTD.
7-5-3-4F Nishi-Shinjuku, Shinjuku-ku,TOKYO 160-0023 JAPAN
Tel +81-3-3363-5740 Fax +81-3-3363-5768
E-mail k-shiota@shotenkenchiku.com

New Year Special

新たな潮流を生み出す 仕掛人に聞く

「店舗論」

中村貞裕／南貴之／今泉清文／関口正人／野村訓市

New Shop & Environment

IGUANEYE Aoyama

Feature Article 1

Fine Restaurant

Feature Article 2

Specialty Shop

vol.80

商環況 INTERVIEW

建築家&職人集団

ciguë

シグー

都心に近いフランス・パリ郊外東部のモントルイユは、アーティスト、デザイナー、建築家、舞台装飾家といったクリエーターや各種制作工房が点在する。そんな町の一角にあるシグーの事務所を訪れた。
シグーは、2008年に建築学科を卒業した6人の仲間が立ち上げた建築事務所。現在、ファッションやコスメティックの有名ブランドの店舗を多数設計し、家具や什器の制作も自ら手掛ける。国内外で高い評価を得るクリエーター集団は、どんなアトリエで何を考えながら設計活動を展開しているのか。設立メンバーの1人で代表のユーゴ・ハース氏にインタビューした。

取材・文／浦田 薫（デザインジャーナリスト）　撮影／高木康広

パリ近郊にあるシグーのアトリエ。事務所内には工具や素材が数多く並ぶ木工作業場がある

18人のスタッフと常時15のプロジェクト

── 事務所を立ち上げてから6年が経過しました。立ち上げメンバーの6人はどのような役割を果たしているのですか。

私たちは建築学科の仲間同士で、学生時代から個人邸の設計をしていました。卒業後もその延長で、息つく暇もなく、事務所を設立しました。当時は、主にパリ市内のアパートメントの設計が多かった。現在では、コアメンバー6名にスタッフ12名の事務所です。6人の役割が明確にあるわけではなく、一つのプロジェクトに全員が参加するといった感じです。
その中で私は、新規プロジェクトのマネジメントをする立場で、スタッフを総括的に監修しながらプロジェクトごとにチームを編成し、6人が各プロジェクトのチーフに就くといった進め方です。
2008年頃は、2、3軒のアパートを設計していましたが、現在では、15件ほどのプロジェクトを並行して手掛けています。また、個人の施主よりも、企業単位の施主が多くなりました。

シグーの創設メンバーの1人、ユーゴ・アース氏

手でつくる実践的な過程から次のステップへ入りつつある

手作業から頭脳のステップへ

── イザベル・マランやイソップといった企業規模のクライアントとどのようにして仕事をされるようになったのですか。

始まりは、ブティック「イザベル・マラン」からの店舗設計依頼で、現在も続いています。また、オーストラリアのスキンケアブランド「イソップ」も、先方から共に仕事をしたいと依頼を受けました。光栄なことです。企業単位のクライアントであっても、信頼関係を築けているので、プロジェクトの要所を決定するまでの時間が短縮できる関係にあります。個人のクライアントであれ、企業のクライアントであれ、こうした人間関係を大切にして設計活動をしたいと考えています。
特にクライアントが大きくなるほど、議論やコミュニケーションがいかに大切か、強く感じます。いくらアイデアが良くても、デザイナーが殻に閉じこもっていてはデザインは成立しません。

── 施主から指名される強みは、シグーがコンセプトだけを売るのではなく、家具などの制作もできることを高く評価されているからなのでしょうか。

おそらく、施主は、我々に設計依頼をするまでに、他の事務所やデザイナーをリサーチしていると思います。ご存知かもしれませんが、我々は以前、すべての意匠を自分たちで制作していました。しかし今では、世界の各都市でプロジェクトを抱えているので、家具や什器の制作、施工に時間を費やすことができなくなりました。また、建築規模のプロジェクトも増えているので、このアトリエで実際に制作できるものは、イス、テーブル、書棚などのオリジナルピースです。それらに加えて、プロジェクトの模型やプロトタイプはすべて事務所内の工房で試作しています。
事務所の設立時から現在まで、素材を深く理解し、ディテールを調整し、そして家具や空間を構成するというプロセスをこなしてきました。私たちのアトリエは、いつも絶えず試作ができる環境ですし、このエリアには、金属、木工細工に特化した工房、金物商があり助かっています。偶然にも、空き物件を見にきたのがこのモントルイユでしたが、ここはものづくりに最適の場所と言えます。しかし、こうした実践的なやり方が第1の過程だとすると、今後は頭脳を働かせていくという次のステップに入りつつあるのだと感じています。

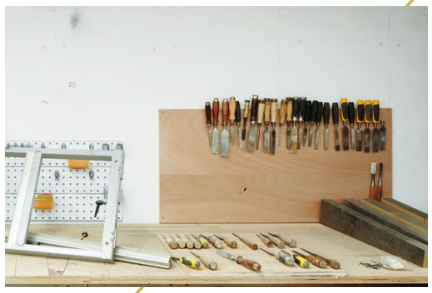
コンセプトと工房が対立するフランス

── 昨今の建築やデザインの教育では、実践的に手を使ったものづくりから距離を置いているように見受けられますが、その点をどう思われますか。

大学2年生の時に、手でつくる楽しさを味わい、あるきっかけがありクライアントからプロジェクトの依頼が舞い込んだのですが、まだ学生の身分ですから、建築事務所を設立できませんでした。しかし、実際に自分たちの手で制作することへの関心と意欲はありました。フランスの建築やデザイン学校の教育は非常にコンセプトを重視します。アングロサクソン系の国では、コンセプトと工房が共働しているのに対して、フランスでは対立しているのです。そんな国柄ですから、私たちは当初、建築家というよりも「若いアーティスト」などと呼ばれていました。しかし、私たちのやり方を続けることで、時間を掛けて真面目に制作をする姿勢を理解してもらえるようになってきました。

── そうしたデザインへの意欲を、ブランドのアイデンティティーにどのように反映していますか。

イソップのように、各々のプロジェクトを異なる建築家に依頼するのが方針でありながら、共通したブランドイメージを築いているブランドがあります。イザベル・マランは、我々が関与する以前に5店舗程ありましたが、根底にあるブランドイメージを変えずに、躍進したいという希望がありました。我々は、ブランドのストーリー性や歴史を理解しつつ、新たなデザインを提案しなくてはなりません。



上2点／アトリエの隅々に道具や素材が置かれ、自分たちの手でものをつくるシグーの原点を感じることができる　下左／事務所典の作業スペース　下右／製図や模型製作をするオフィススペース。事務所内のどこにいても、木材を加工する電動工具の大きな音が作業スペースから聞こえてくる

── 既存のデザインを刷新するほうが、新規デザインの立ち上げよりも困難と思われますが。

例えば、現在進行中のあるブランドでは、商品の売り上げは安定しているものの、店舗や売り場環境が時代に沿っていなかった。そうしたクライアントからは、まず問題を抽出し、そのブランドが持つ普遍的な要素を探り出し、深いアイデンティティーを再構築する作業が必要になります。とても複雑です。具体的な手法としては、ブランド力につながる既存の素材や形などを抽出して再構成したり、異質な素材から既存の形をデザインしていくといった作業をします。

更に、建築家の立場として、街に根付く店舗設計の場合は、その店の空間が都市空間と密接につながっていることを忘れてはなりません。例えば、既存の壁の質感が美しければ、それを取り入れた設計を試みます。そのため私たちは、意匠を設計するまでに、リサーチと観察に多くの時間を費やします。

── ヴィクトル・ユーゴ通りのブティック「イザベル・マラン」（P.216）でも、アラン・デュカスのチョコレートショップ「ル・ショコラ」（P.218）でも既存空間の痕跡を残していますね。

歴史的なストーリーがある場所では、とりわけそのような要素に敏感になると思います。特にパリ市内には、そうした場所が多い。しかし、ブランドによっては、既存の一部を残すことが完璧な回答ではない場合もあります。日本のように、解体することを恐れない現代的な文化もありますが、パリは、美術館のような街のため、多くの制約が発生し、ある意味では柔軟性に欠けるとも言えます。その点、日本では、新旧が柔軟に融合していますね。

素材や納まりから デザインを発想していく

── 東京のイザベル・マラン（12年12月号）の設計では制約が多かったのでしょうか。

あのプロジェクトは、イザベル・マラン、（イザベル・マランとフランチャイズ契約を持つ）トゥモローランド、そして我々の三者によってつくり上げたもので、完成までに多くの議論がなされました。既存の空間は70年代の建物で、コンクリートと木造の混構造。日本家屋とスウェーデン家屋が混ざったような様式でした。現場で木造の軸組みがあらわに見えてきた時、「これは残そう」と思いました。日本で初めてのプロジェクトでしたので、フランスっぽさを取り入れて失敗することは許されませんでした。ブランドには、コンクリート、鋼鉄、ナラ材が既に使用されていましたので、黒い畳、障子のイメージを樹脂で表現するなどして、使う素材の種類を増やしました。こうしてブランドに素材のバリエーションを少しずつ取り入れることで、既存のブランドイメージを尊重しつつ拡張しています。

── 2014年3月末、パリにオープンした「アラン・デュカス ル・ショコラ」を手掛けられた経緯は？

きっかけは、アラン・デュカスグループのグラフィックデザイナーからの紹介でした。チョコレート工房がオープンした後、ル・ショコラの設計依頼を受けました。初回のプレゼンテーションには、いろいろな素材を持って行きました。日本を訪問した際に出合った釘もそのうちの一つでした。デュカス氏は、プロジェクトの全行程を監修し、細部にまで注意を払う人物です。ヴィンテージ品のコレクションをしているので、彼の収集したオブジェや家具を店内にも設置しています。天井照明やショーケースの台などです。チョコレートは、温度管理が必要な繊細な商品なので、冷ケース什器のデザインには専門家の技術が必要でした。2015年には、パリ市内にアラン・デュカスの新しいレストランがオープンしますが、そこでも空間と家具のデザインを担当することになっています。

── 今後、国外でのプロジェクトはさらに増えていくと思いますが、シグーとしてはフランス流の考え方やデザイン手法を主張していくのか、それとも国などを意識しないデザインへと向かっていくのでしょうか。

今日、世界の大都市においては、似通ったデザインで溢れている状況にあります。我々は、フランスに生まれ育っているので、受けた教育もその土地のものです。しかし、フランスを意識するということよりも、我々の正直な生き方や考え方を設計やデザインに反映していきたいと考えています。ブランドの大小にかかわらず、正直な回答をデザインに込めていきたい。

また、構造は多くを語ると考えています。我々の意匠は、使い手や消費者にとって、分かりやすく、素材や納まりもシンプルで明快です。日本人はものづくりで「納まり」という考え方を大切にしていると思いますが、私たちも共通する意識を持って活動しています。

今後は、デザインしたSACAIのコーナーショップが、パリ、北京、香港、ロンドン、ソウルにオープンしていく予定です。今後の展開も楽しみにしていてください。

東京・表参道の「イザベル・マラン」（12年12月号、撮影／髙山幸三）

INTERVIEWER'S NOTES

歴史や伝統に敬意を払うフランス。保全されている地区や建築も多く、設計業務には制約が伴う。従って、都市計画と建築設計は密な関係で協働する頻度が高い。そんな事情を背景に、シグーのような若手建築家たちがどのように設計という仕事を捉えているのかが興味深かった。国際的な資本が運営する商業施設が目立つ時代だが、パリ市内には小規模の路面店が多く残り、商人と客の対話の大切さを守っている側面もある。シグーが日本のものづくりの「納まり」に共感を抱くのは、このコミュニケーションにつながる、使い手へのおもいやりがあるからだろう。道具や機械的なメカニズムにあふれた工房で、手を動かしながら頭脳作業を進行するシグーの活動は、手作業と頭脳作業の連関が失われつつある教育の場でも手本にもなるのではないだろうか。

〈浦田薫〉

事務所内で模型を製作する

ciguë
（シグー）

学生時代からの友人であった6人の建築家によって2003年に設立。建築やインテリアの設計から家具やアートワークの制作まで、幅広くプロジェクトを手掛ける。設計者であると同時に、自らの手を動かしてデザイン開発をしていくアプローチに特徴がある。パリ郊外に事務所兼木工製作所を構える。

エントランス左手の靴とアクセサリーのコーナー。標本箱をモチーフにした壁面ディスプレイは世界各店で共通

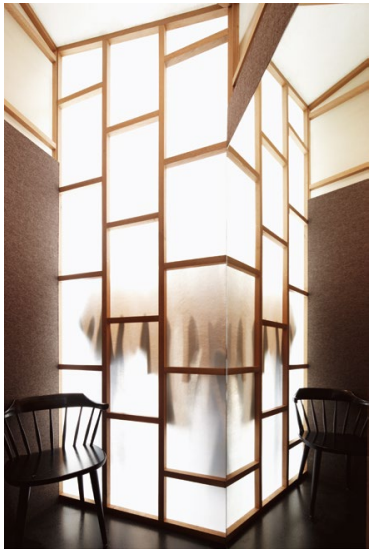
Boutique

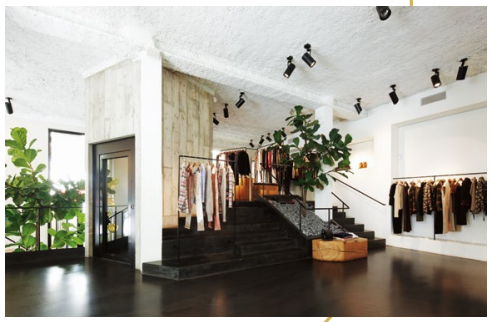
ISABEL MARANT Victor Hugo

イザベル・マラン ヴィクトル・ユゴー通り

撮影／高木康広

上／ファッションブティックが立ち並ぶヴィクトル・ユゴー通りにある「イザベル・マラン」のショップ。シグーが設計を手掛け、2012年にオープンした。左手がエントランス。中央のエレベーターシャフトを中心にして、螺旋状に上がっていくプランニング　下／緑に囲まれた外観。周辺にもクラシカルな建物が並ぶ





左／FRPを用いた試着室内部
右上／店内奥から見返す。商品陳列スペースは比較的少なく、ゆったりした空間　右下／店内奥の試着室

左／アラン・デュカスのチョコレートショップ「ル・ショコラ」。エントランスから店内を見通す　右上／店内奥のスチール製レジカウンターと照明。壁面には紙袋が並ぶ　右中／外観。大通りから少し入った場所に立つ　右下／エントランスの床タイル。改装前、この区画は、隣接する老舗カフェ「カフェ・ド・フロール」のショップだったため、その店名サインの描かれたモザイクタイルをあえて残した

Chocolate Shop

LE CHOCOLAT Alain Ducasse

アラン・デュカス　ル・ショコラ

撮影／高木康広